SOWER

ソア＝種まく人

No.32
August 2008
財団法人
日本聖書協会

特集 聖書の翻訳とは

「聖書翻訳ワークショップ」をふりかえって

SOWER ソア No.32

2008年8月10日発行
【年2回発行】

発行・財団法人 日本聖書協会

〒104-0061 東京都中央区銀座四丁目5-1 聖書館ビル
電話 03-3567-1988 FAX 03-3567-4451 振替 00160-2-18410

新共同訳 発刊20周年

7月下旬 発売

もっと聖書が見える、
もっとアートが読める。

アートバイブル2

『聖書 新共同訳』抜粋

『アートバイブル』から5年。
さらに深く聖書に、よりアートに近づくための1冊、
『アートバイブル2』の完成です。
より広がった美術と聖書の世界へ、あなたをお連れします。

109作家 305作品収蔵 作家別・所蔵場所別索引付
A5変形判 512ページ 全編フルカラー

定価 3,150円（税込）

■お求め、資料請求はお近くのキリスト教書店まで

財団法人
日本聖書協会
JAPAN BIBLE SOCIETY

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 聖書館ビル
TEL 03-3567-1987 FAX 03-3567-4451
http://www.bible.or.jp

携帯用のご注文サイトです

ホームページからもご注文いただけます（送料別途）

財団法人 日本聖書協会のホームページ
http://www.bible.or.jp

編集協力＝雑賀編集工房
デザイン＝株式会社 デザインコンビビア

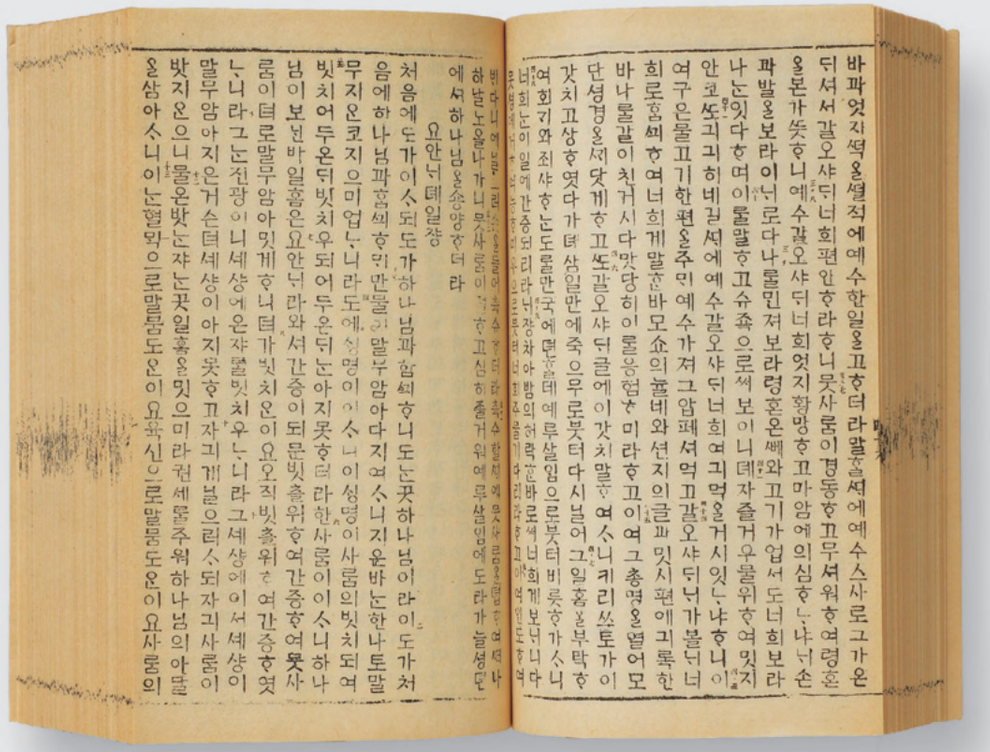
印刷＝株式会社 高速オフセット

R40
古紙配合率40%再生紙を使用しています

聖書図書館蔵書シリーズ──㉚

イエス聖経全書　朝鮮語新約聖書 ロス訳

英国聖書協会　奉天　1887年
（韓国聖書協会　ソウル　再版1956年）
縦：19cm　横：13cm



朝鮮文字による最初の新約聖書。スコットランド長老派の宣教師ジョン・ロスが翻訳した。

ロスは中国・山東、満州で伝道した後、韓国人への伝道を志し、朝鮮語を学んだ。ロスは数人の韓国人とともに、まずルカ福音書、ヨハネ福音書を訳し、1882年に出版した。1887年には『イエス聖経全書』として新約全書の翻訳を完成し、5,000部を出版した。

ロスは、特に上流層ではない一般大衆にふさわしい言語と文体で翻訳し、福音を伝えようとした。そのため方言を使用している。また、ロスは韓国人たちを聖書配布人として雇い、聖書を配布した。

この新約聖書は、原本が1950年に焼失し、韓国聖書協会が1956年に非売品として再版したものである。

新聖書の世界 31

写真／文　横山匡

タドモル

ダマスコから北東に二四五キロメートル、砂漠の真っ只中に、なつめやしの林が広がるオアシスがあります。パルミラ遺跡はこの傍らに栄華の名残を、揺らめく陽炎のように見せて横たわっています。歴代誌下八章四節に「（ソロモンは）荒れ野のタドモルと、ハマト地方の補給基地の町をすべて築き上げた」とあるタドモルがパルミラです。タドモルもパルミラも「なつめやし」の意味です。

時代は遡り、アブラハムは神の声に従ってハランを発ち、二六〇キロメートル南のタドモルを経て、ダマスコ、ガリラヤと、当時の通商路を通ってカナン入りしました。

パウロは、ダマスコ郊外のコーカブの丘でキリストの光に打たれて回心したあと、「アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした」（ガラテヤ一・一七）と言っていますが、アラビアはパルミラであったという説があります。当時は壮麗なベル神殿も建設され、隊商都市として繁栄を極めていた頃です。異教の神々が祭られたこの町で、異邦人伝道の道を開くための祈りを深めていたのでしょうか。今年はパウロ生誕二〇〇〇年に当たり、「パウロ年」と定められています。

巻頭聖句

マグダラのマリアと
もう一人のマリアとはそこに残り、
墓の方を向いて座っていた。

（マタイによる福音書27章61節）

主語は複数なのに、動詞はどうしたことか単数形。
ミスプリントでも、間違いでもなく、
マタイがどうしても伝えたかったことが表現されているのであろう。
「墓に向かって座す」とは、死の世界、すなわち、不可能に対座して祈ることを示す。
これは、教会のとるべき姿勢なのであろう。
何も期待できない墓に向かって、「心を一つにして求めるなら」（マタイ18：19）、
天の父はそれをかなえてくださる、ということをマタイは言いたかったのであろう。
「日本は宣教師の墓場」と言われて驚いた。
そんなことはない。墓石は動くもの。奇跡は起こるもの。
マイナスは必ずプラスになる!!　日本の教会は必ず変えられる。
お互いに違いを認め合って、心を合わせて、
墓を破られた主を信じて、祈り続けよう。

大川従道
おおかわ　つぐみち
大和カルバリーチャペル　主任牧師

CONTENTS

Sower
No.32
2008

2 ソア32号発行によせて　BS NEWS　渡部　信
3 特集 聖書の翻訳とは「聖書翻訳ワークショップ」をふりかえって　編集部
8 聖書セミナー⑩　春名純人　聖書と哲学
10 人物と聖書⑰　鈴木範久　西田幾多郎と聖書
12 エッセー㉙　木崎さと子　聖書には「ちゃんと書いてある」
14 Bible Guide　みんなの聖書　絵本シリーズ、マンガシリーズ
16 JBS情報　久米小百合さんが　親善大使2年目を迎えました　ほか
18 2009年『日めくり聖句カレンダー』販売のご案内
19 2008年度「海外聖書製作支援」計画について
20 日本聖書協会　後援会にご入会ください！
21 聖書図書館蔵書シリーズ――㉚　イエス聖経全書　朝鮮語新約聖書　ロス訳

表紙の言葉
今回の表紙は南の島、沖縄の竹富島を描きました。このイラストを制作するにあたりたくさんの資料を見ている時は、今にも飛んでいきたい衝動を抑えるのに大変でした。この南の島の青い空、青い海、そしてなによりも独自の文化を育んできたその歴史に浸りに行きたいと思います。
（絵・文＝佐藤百合子）

ソア32号発行によせて

会報誌『SOWER』ソア（＝種まく人）32号をお届けいたします。

財団法人　日本聖書協会
総主事　**渡部　信**

日本聖書協会のために常日ごろお祈りとご支援をいただき、感謝申し上げます。昨年『聖書 新共同訳』は発刊20周年を迎え、本年７月には頒布数がほぼ1,000万冊に到達しました。冊数を正確には数えられないので、7月2日、全国12のキリスト教書店にて順番をあらかじめ決め、1,000万人目と想定されたご購入者の方へ、このことをお祝いする意味で日本聖書協会より記念の聖書を差し上げました。

このようにたくさんの方に読まれてきた『聖書 新共同訳』ですが、「次世代」を意識し、『みんなの聖書 絵本シリーズ』全36巻と『みんなの聖書 マンガシリーズ』全５巻を出版することになりました。聖書原典を研究される方には、『聴いて読めるギリシア語聖書』（ギリシア語音声ソフト：日本語新約聖書対照版）を開発しており、近日中に出版予定です。どうぞご利用ください。また、さらに日本語として読みやすい、新共同訳に続く次世代の聖書翻訳作業についても現在検討中です。

日本聖書協会の願いは、私どもの聖書を通して「神様のみ言葉」が一人でも多くの方々に読まれ、ぜひ日本の国にもっとクリスチャンが与えられることです。2009年は日本プロテスタント宣教150周年にあたります。全プロテスタント教会に参加を呼びかけて、記念式典をパシフィコ横浜で開催することが計画されています。もちろんプロテスタント宣教から450年遡って、カトリック教会による布教とその後、厳しい迫害を受けてきた歴史を踏まえつつ、この機会を捉えて皆様と協力して、日本プロテスタント宣教150周年記念集会を応援したいと思います。皆様の上に主の恵みを祈ります。

BS NEWS

「バングラデシュにバンを贈呈」

渡部　信　日本聖書協会総主事　わたべ　まこと

4月にバングラデシュ、ダッカ市にある聖書協会を会場に、アジア・太平洋地区総主事会議が行われました。バングラデシュは、小さな国の中に1億6千万人が住むイスラム教国で、クリスチャン人口は日本と同じ1パーセント以下の伝道がたいへん難しい国です。ほとんどの国民が貧困にあえぎ、路上で寝起きする人々がたくさんいたのを見て悲しく思いました。バングラデシュ聖書協会は、年間およそ100万冊の聖書を頒布しています。日本聖書協会から2007年に寄贈されたトヨタのバンが、そこで人員や聖書の輸送に大活躍しています。改めてたいへん感謝されました。バングラデシュでは、聖書だけでなく毛布や食料を洪水の被災者に配っているそうです。そのような行為があって初めて聖書が受け取ってもらえるという特殊な環境に置かれているのです。

日本聖書協会が寄贈したバン

特集　聖書の翻訳とは

「聖書翻訳ワークショップ」をふりかえって

三月一二日、一三日の二日間、国際文化会館（東京・六本木）において「聖書翻訳ワークショップ」が日本ウィクリフ聖書翻訳協会と日本聖書協会の共催で開催されました。聖書翻訳の最新理論や日本語の変化についての講演、少数部族の言語への聖書翻訳の実例紹介など、翻訳ワークショップの様子を報告します。

編集部

桜にはまだ早く、肌寒い日が続いていた三月中旬、国際文化会館の美しい日本庭園では、紅白の梅の花が春の訪れを告げていた。『聖書 新共同訳』発刊二〇周年を機に企画された今回の「聖書翻訳ワークショップ」には、海外からの一名を含む四人の講師が招かれた。落ち着いた雰囲気を持つ会場で、聖書翻訳の現在に高い関心を持つ方々およそ五〇名が参加し、和やかなうちにも活発な議論が交わされた。

聖書翻訳を支える最新の理論

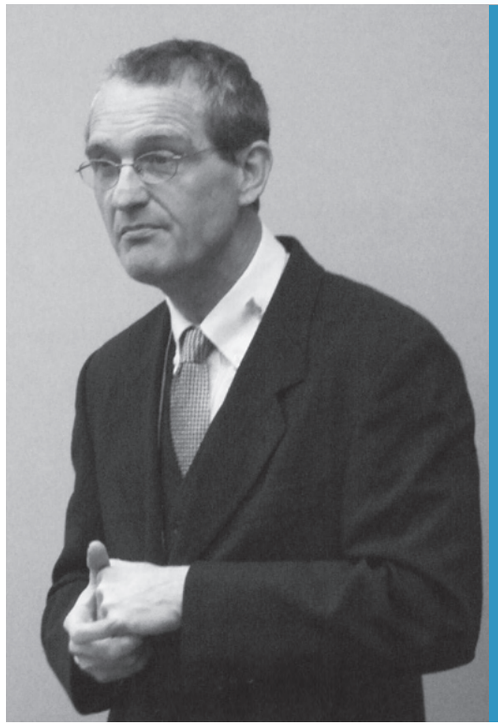
今回、実質的な基調講演を行ったデ・フリス氏は、一昨年の『国際聖書フォーラム２００６』に続く二度目の来日。教鞭をとるオランダのア

ムステルダム自由大学は、大学院レベルで聖書翻訳の講座を持つ世界で唯一の大学だという。

学期の合間などに定期的にインドネシアへ飛び、聖書翻訳指導を行っている氏が提唱する「スコポス理論」では、聖書がどのような人々を対象にし、それにどのような役割を持たせるのかという視点から聖書翻訳を行う。〈スコポス〉には「目的」「機能」「目標」「役割」といった意味があり、たとえば、礼拝でクリスチャンが使うことを主たる「目的（スコポス）」とした翻訳であれば、「贖（あがな）い」「神の国」「義認」など、クリスチャンが慣れ親しんだ言葉を用いるといったことである。一方、キリスト教の背景が全くなく、聖書を読んだことのない若い世代に聖書の言葉を伝えるということを主たる「役割（スコポス）」と設定して新たな翻訳をするとすれば、「贖い」「神の国」「義認」といった独特な用語を伝わりやすいように変える配慮や、文体などに世代に合わせた工夫が必要になってくる。つまり、「子供のための聖書」「イスラム教徒のための聖書」「聖書研究のための聖書」というような特定の目的（スコポス）を明確に設定することで、翻訳全体に一貫性を持たせることがスコポス理論の主眼といえる。

オランダ語訳聖書での実践

二〇〇四年に刊行され、非常に高い評価を得ているといわれる新しいオランダ語訳聖書の翻訳作業では、旧約聖書の神名「YHWH」について、聖書学者が「ヤーウェ」「ヤハウェ」「JHWH」「その名」「主」といった可能な選択肢を提示し、その中から翻訳者がスコポスに従って「主」を選んだという。翻訳は常に「原典への忠実さ」が求められるが、ここに挙げた選択肢はすべて原典から許容される範囲であり、どれが「正しい」訳であるかは、このままでは判断できない。ここで〈スコポス〉の登場となる。翻訳者は、聖書学者が示す選択肢の中から翻訳の目的（スコポス）に最も適っていると考えられる訳語を選ぶ。逆に見れば、先に挙げた「贖い」などの言葉が〈スコポス〉に合わないと翻訳者によって判断されたとき、別の可能な選択肢を示すのが聖書学者の役割ということになる。この点において翻訳者と聖書学者の役割は明確に区分される。スコポス理論においては、訳を決めるのは〈スコポス〉であって、訳者の主張や好みではない。つまり、唯一の正しい訳を目指すのではなく、複数の正しい訳から目的（スコポス）に最も適う語を選択する翻訳ということである。


ローレンス・デ・フリス氏

まだ訳されていない言語への聖書翻訳

今回のワークショップは日本聖書協会の単独開催ではなく、日本ウィクリフ聖書翻訳協会との共催であることが特徴のひとつ。同協会からは二人の講師が参加した。イラルトゥ語というインドネシアの部族語への翻訳に携わる松村隆氏からは、まだ聖書が訳されたことのない言語に聖書を翻訳する際の現場の苦労を伺った。一例として、「ともし火を……入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く」（ルカ一一・三三）にまつわる話をご紹介しよう。何の問題もない文章のようでも、イラルトゥに燭台というものがないとなると、話は違ってくる。当然、それを意味する単語もない。そこで、部屋を広く照らす灯りはイラルトゥでは梁（はり）にかけるランプであったことから、「……光が見えるように、梁に引っ掛けます」と翻訳したという。その他、「ありがとう」にあたる表現がないなど、二日目に開かれたディスカッションでも、氏の語る苦労話は参加者の興味を大いにひいていた。

松村隆氏（左）と福田崇氏

もう一人のウィクリフからの講師、福田崇氏のテーマは、翻訳がひと通り済んだ後の検証過程について。その過程は実に九段階にも及び、たとえば、内容を知らない人に読ませ、質問し、翻訳の不具合を見つける段階、朗読による文章の滑らかさのチェック、訳語の統一性の検証など、その過程はきめ細かに定められているという。なかでも目新しく感じられたのは、完成した訳文を英語などの一般的な言語にさらに訳すことで、訳の完成度を確認する過程であった。

少数民族の言語への翻訳では、財政的・人的理由から改訂はほぼあり得ないので、細心の検証過程が必要とされるとのことだったが、よりよい翻訳のために何重にもわたる確認、検証が必要なのは、どの言語でもかわりないだろう。「下訳はプロセスの十分の一でしかない」という福田氏の言葉が印象的だった。

言葉は変化する……

日本語への翻訳について考えるのであれば、当然のことながら、日本語のことを知る必要がある。学習院女子大学の福島直恭氏には、「日本語の変化」を焦点にお話を伺った。よく日本語の「乱れ」の例として「ラ抜き言葉」が挙げられる。「食べれる」など、若者独特の言葉のように思われているが、すでに一〇〇年ほどの歴史があるそうである。今日では一般に「食べられる」が「正しい」と考えられているが、将来において単に「古めかしい」形になり、やがて消えていく可能性もあることが、すでに日常語としては「書いて」に取って代わられた「書きて」を例にして説明された。若い世代であっても、自分たちの言葉を携えたまま年を重ねていくとい

講演一覧

ローレンス・デ・フリス
アムステルダム自由大学教授・聖書協会世界連盟翻訳指導員
「翻訳理論入門」

松村　隆
日本ウィクリフ聖書翻訳協会・協力メンバー
「釈義と翻訳の実際」

福田　崇
アジア・大洋州区ウィクリフ総主事
「聖書翻訳のプロセス ～翻訳チェックの方法を中心に～」

福島　直恭
学習院女子大学教授
「日本語の変化について ～進化か それとも堕落か？～」

福島直恭氏

う単純な事実を考えれば、こうした変化が不可避的に進行しているというのも頷ける。こうしたことを「言葉の乱れ」「堕落した日本語」などと否定的に表現すべきではないというのが氏の主張のひとつであった。

日本語に限らず、日常的に使われている言語の変化は、ゆっくりとしてはいるが、避けることはできない。今回は「乱れ」として捉えられている変化をきっかけに話は進められたが、その他の変化も静かに進行しているのは明らかであろう。「正しい」「乱れている」という判断はすべきではないとしても、広く一般に受け入れられる翻訳を目指すのであれば、「新しい」か「古い」かを判断する日がいつかやって来る。大多数の人が「古い」と判断するようになったとき、日本語の変化はひとつ進むということになろうか。

＊　＊　＊

ワークショップをふりかえって、改めて聖書翻訳について考えてみたい。

ナイダ理論と逐語訳

「動的等価」という翻訳理論についてご存じの方は、デ・フリス氏のスコポス理論をその発展型とお思いになるかもしれない。提唱者ユージン・ナイダの名をとって「ナイダ理論」などとも呼ばれるこの理論では、原典の持つ意味を伝えるために、かなり大胆な意訳を行う。ワークショップでとりあげられたイラルトゥ語への翻訳で、「燭台」を「梁にかけるランプ」と訳したのはその好例である。「雪のように白く」という句を、雪に全く馴染みのない南国の言葉に訳す場合、現地で「雪のような」白さを持つものを訳語に採用して、たとえば「ヤギの乳のように白く」と訳す。

この理論による翻訳は、一九七〇年代から八〇年代にかけて各国で盛んに試みられた（一連のいわゆる「グッドニュース・バイブル」）。

日本でも一九六六年にナイダ氏を招き、聖書翻訳者研修会が開催され、その理論に従って翻訳された『新約聖書 共同訳』が一九七八年に刊行されている。こうした試みは、聖書独特の用語や文化を十分に理解できなくても聖書のメッセージが伝えられるようにという願いを背景にしている。この点でナイダ理論は、伝道の手段としての翻訳という、聖書翻訳の特殊な側面を如実に示したものといえる。

原典をできる限りそのまま訳す「逐語訳」は、極端な場合になると、語順や時制など文法的要素も可能な限り（あるいは不自然な形であっても）原典の文法に近づけようとする。程度の差はあるが、逐語訳には、原典の「形」を保存しようとする傾向がある。それゆえ、「形」の保存を堅持するために、「意味」が伝わりにくくなる場合もある。ナイダ理論はそれに対して、原文の持つ「意味」に忠実であろうとして、「形」の保持にはこだわらなかったのである。

スコポス理論がもたらすもの

さて、どちらが「原典により忠実」だろうか。その答えを出すのは簡単なことではない。「意味」と「形」――基準が違うのである。しかし、これまでの歴史をふりかえってみると、「動的等価と逐語訳ではどちらが優れているのか」が問われ、多くの葛藤が見られた。日本でも、「動的等価」に基づく訳は、新約聖書を訳した『共同訳』だけで、逐語性重視の方針に切り替えられ、現在の『聖書 新共同訳』につながった。デ・フリス氏のスコポス理論は、スコポスすなわち翻訳の目的という仲介者を導入することによって、動的等価と逐語訳の間の不要な対立を解消しようとする。

スコポス理論の中心である「訳語の選択基準の設定」が持つ意味は想像以上に大きい。それは「正しい訳とは何か」と問うことでもある。多くの場合、原典に対していくつかの訳の可能性が示されるが、スコポスが明確に設定されていない翻訳では、選択基準が不明瞭であるため、あるひとつの訳語が選ばれ、他の候補が不採用になった理由は明らかにされない。そこでは、選択された訳語の「正しさ」が示され、選ばれなかった語は「間違い」とされかねない。スコポス理論は、そこに「正誤」ではなく基準の相違を設定することで、翻訳過程を透明化する。

スコポスの設定によって、翻訳者同士の軋轢は格段に減り、読む人が感じる疑問も大幅に減るだろう。

翻訳と原典

明治訳以来、聖書の日本語訳には、すでに一〇〇年を超える歴史がある。七十人訳ギリシア語聖書に始まる聖書翻訳の長い歴史からすれば短いが、それでも主な和訳聖書の種類は、ざっと挙げるだけでも一〇近くになる（図参照）。ひとつの翻訳で十分とされず、いくつもの和訳がなされたのは、それぞれに意図があってのことだろう。世代によって、馴染み深く聞きやすい言葉は変わっていく。それもまた、新たな翻訳が行われる要因のひとつとなる。

すでに日本語に訳されている言葉を見つめ直す必要は常にある。既存の訳を比較すれば、そこに先人たちの労苦が見てとれ、あるいは新しい訳案も見出されるかもしれない。いずれにしても重要なのは原典ということになる。今年、日本聖書協会では、聖書の原典が辿ってきた歴史を中心テーマに、毎年恒例の「春の聖書セミナー」を行った。機会があれば、その模様もいずれお知らせできればと思う。

＊　＊　＊

聖書の翻訳は終わりのない作業である。新しい訳が完成すれば、次にはその改訂が計画される。聖書の言葉を伝える最善の手段が常に追求されているのである。

主要な和訳聖書

16世紀後半　キリシタン訳
（中国語訳）
江戸末期～明治初期
宣教師たちによる訳

聖書協会訳

1887	文語訳（明治訳）
1917	文語訳（大正改訳）
1955	口語訳
1987	新共同訳

主要な聖書翻訳

前3～2世紀	70人訳聖書（ギリシア語）
4世紀	ウルガタ（ラテン語）
1522	ルター訳（ドイツ語）
1611	ジェームズ王欽定訳（英語）
1946	改訂標準訳（英語）
1976	「グッドニュース・バイブル」

カトリック系

1910	ラゲ訳
1964	バルバロ訳
2002	フランシスコ会訳

その他

1901	ニコライ訳
1970	新改訳
2004	岩波訳

聖書と哲学

春名純人
はるな　すみと
関西学院大学名誉教授

1 哲学の聖書的前提

哲学は無前提の学であると言われていた。しかし、現代哲学においては、哲学は無前提の学ではなく、何らかの先行的理解が超理論的前提として存在し、それがそれぞれの哲学の理論的思惟のパラダイムを根本的に規定していると考える超越論的哲学の系譜が存在する。超越論的課題とは、「理論的思惟を超越していながら、かえって理論的思惟を可能にし、規定している条件」を研究することである。ある者はその超理論的前提を「宗教的・確信知」と呼び、ある者は「前理論的・宗教的根本動因」と呼ぶ。

キリスト者は、神のかたちにおける再生において、心に「創造・堕落・救贖」という聖書的根本動因を刻みつけられた者である。この心に刻みつけられた超理論的前提が、彼の理論的思惟と行為を規定する。キリスト教哲学は、この聖書的前提、超理論的前提に基づいて、再生理性が理論的・学問的認識を構築する可能性を考える超越論哲学である。

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」（二コリ五17、以下口語訳）。キリスト者は、知識と義と聖において、神のかたちに再創造された者である。「あなたがたは、……心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」（エペ四22―24）。「造り主のかたちに従って新しくされ、真の知識に至る新しき人を着たのである」（コロ三10）。聖書はキリスト者を、神のかたちに再創造された新しき人であると語る。聖書では「心」［ここではヌース、他のところではカルディア］は、心性の諸機能の中心を示す特別な意味で使用されている。カルヴァンは、「こころ」（cor）は、神のかたちの宿る「座」であり、「こころの諸能力」［知性、理性、意志］はこの心に根（radix）を持つと述べている。キリスト者の心は、知識と義と聖において神のかたちに再創造された心である。神のかたちは、真の神と人間の真実の姿を知る知識である。この知識は、理論的な教義学的知識ではない。「再生の洗い」（テト三5）を受けたすべてのキリスト者が共有している、いわば超理論的前提であり、聖霊によって直接、心に刻みつけられた超越論的知識である。この心に根を持つ再生理性が、この前提に従って神・人間・世界を解釈するところに、教義学的知識や学問的知識などの理論的認識が成立する。

2 「我思う、故に我あり」か「神光あれと言たまひければ光ありき」か

カントは、「時間」は、認識能力の一つである感性の先験的形式であり、因果性などの十二の範疇は、もう一つの認識能力である悟性の先験的形式であると考えた。時間は、人間の認識主観の側に属する形式である。しかし、聖書においては、時間は認識主観の秩序ではなく、創造の秩序であり、存在の秩序である。神は時間を創造し、第一日目、第二日目と、時間の秩序に世界を創造し給うた。時間は被造世界の存在の秩序であり、この時間の変様が被造世界の多様な法である。被造世界は、神の創造の法に貫徹された豊かな世界である。物理・化学の法則だけをもって、他の法則の支配する領域を一方的に支配的に解釈してはならない。この豊かな世界を、数式と物理・化学の法則のみが支配する貧相な極薄の世界に変革したのは、人間の自由な自律的知性を立法者とし、この「神」のかたちに機械論的自然を創造し、人間と世界を、人間知性が自由に処理可能な機械にした、近代哲学の宗教的根本動因たる「自由と自然」のモチーフである。科学・技術を恐れる近代哲学は、認識論に自己限定し、存在論［形而上学］に発言しなくなる。存在論に発言すると、超絶的形而上学と見なされるためである。存在はあくまで認識論的には「未解釈的存在」であり、認識は、感性が時間秩序にまとめた感性の多様を自律的悟性が理論的認識に構築していく作業である。近代哲学が認識論に自己を限定して存在論に発言しなくなった事情と、近代神学が救済論に自己を限定して創造論に発言しなくなった事情は、並行的な現象である。被造世界は、人間の罪の結果たる悲惨に呻吟しつつ、神の子らの派遣を切に待ち望んでいるのにもかかわらずである。「被造物は、実に、切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる」（ロマ八19）。罪人を救い出す福音の救拯論的意義は、神の子を世に派遣する福音の創造論的意義［創造目的の完成］と連動しているのである。キリストにおける神と人への愛の道徳命令の回復は、「地を従わせる」文化命令の回復と表裏一体である。神を愛することは「宗教」であり、人を愛することは「倫理」であり、地を慈しむことは「文化」である。福音は、創造の回復の福音である。「恩恵は自然を回復する」（gratia restituit naturam.）。

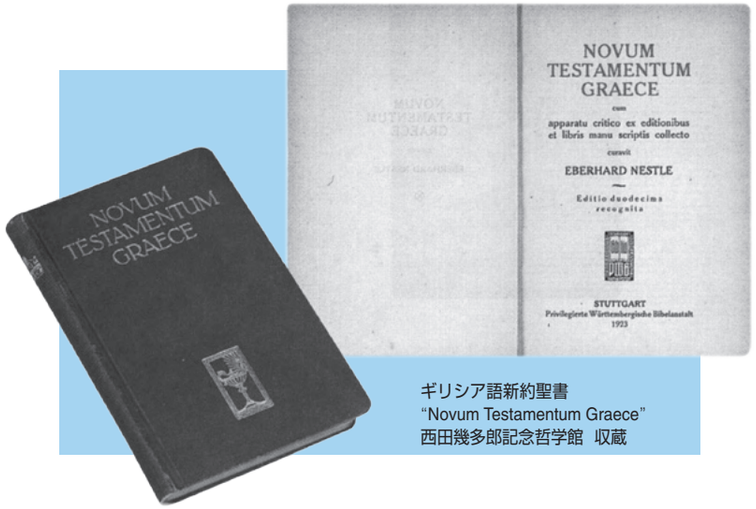
3 聖書の哲学の「存在論」と「認識論」

創造の法は、自然の世界では自然法則であり、精神や道徳の世界では規範である。この自然法則と規範を、信仰に裏づけされた再生理性が調和的に開示することが、「地を従わせよ」という文化命令・創造命令の本来的意味である。いずれにせよ、被造世界は神によって解釈された世界であり、一般啓示、自然啓示の世界である。聖書の哲学の存在論は、「神の創造の法の貫徹する存在」の世界である。再生者の心に刻まれた認識と行為の動機は、主の愛の言葉である。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」（マタ二二37―39、新共同訳）。聖書的前提と愛の動機は再生理性を規定し、再生理性は「神への愛」と「隣人愛」を動機として、聖書の御言葉啓示の眼鏡を通して、「聖書の著者と同一の著者の書いたもう一冊の書物」（カルヴァン）である自然、すなわち、一般啓示、自然啓示の世界を読み解くのである。これがキリスト教哲学の認識論である。福音は、単に魂の救いのみでなく、罪の結果に呻吟する被造世界の回復と創造目的の完成を視野に含む壮大な「すべての造られたものに対する福音」（マコ一六15）である。

※本稿は、二〇〇五年の一一月から一二月にかけてクリスチャンセンター神戸バイブル・ハウスで開かれた「第17回聖書セミナー」の講義内容をもとに、全体のまとめとしてご執筆いただきました。

パウロと「経験」を共有する 西田幾多郎と聖書

鈴木範久
すずき のりひさ 立教大学名誉教授



ギリシア語新約聖書
“Novum Testamentum Graece”
西田幾多郎記念哲学館 収蔵

遺された聖書

西田幾多郎というと、日本を代表する独創的な哲学者として名高い。その哲学思想には、禅をはじめとする仏教思想が強い影響を与えている。しかし、それと同時に、聖書やキリスト教書にもよく親しんだ人だった。晩年、再婚した津田塾大学教師の山田琴は、甲府教会で幼児洗礼を受けたキリスト信徒であり、西田との結婚後も鎌倉で教会生活を送った。

西田と聖書との最初の出会いと思われる文章は、金沢にあった第四高等中学校時代の回覧雑誌に見出される。一八八九（明治二二）年、西田が一九歳のときである。「余ガ最愛スル諸君ニ」と題された短文のなかで「諸君若シ旧約全書第一葉ヲ開カバ」と記して、And God said, Let us make man in our image で始まる創世記一章二六節の全文を引用している。欽定訳といわれる英訳聖書によっている。

この文章のために用いた聖書かどうかはわからないが、一八八五年に刊行された英文の旧新約聖書 The Holy Bible が、故郷の石川県かほく市にある西田幾多郎記念哲学館に遺されている。また、京都大学に収められている西田文庫にも、アメリカの聖書協会から刊行された別の旧新約聖書 The Holy Bible が保管されている。こちらは一八八九年の刊行で、右の文章が記された年と同じである。石川県の西田幾多郎記念哲学館には、ギリシア語の新約聖書 Novum Testamentum Graece も収蔵されている。いわゆるネストレの一二版である。ほかに、部分訳のドイツ語旧約聖書と英文の新約聖書が西田文庫にある（山下正男編『西田幾多郎全蔵書目録』、一九八三年）。

心の糧（かて）

第四高等学校の教師として金沢で過ごした時期の日記をみると、日記帳の見返し部分に記された何冊かの書物のなかに、時々Bibleの文字が含まれている。日記の本文では、一九〇一年五月一四日のところに「午後在宅、羅馬書をよむ。桑原来る。夜ちょっと永順寺にゆき、帰りて又ローマ書一篇をよむ」とあり、一九〇三年から七月二七日には「心魔々々。キリストが野に於ける苦心思ひやらる」と記されている。一九〇九年の日記の見返しにはギリシア語でマタイ伝六章三四節の全文が引用されている。新共同訳によると、「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」にあたる部分である。日記でみるかぎり、聖書は西田の修養書のひとつにみえる。

書簡では、一八九七年一一月一一日、山本良吉にあてて、赴任した山口高等学校における悩みを報じ、「馬太伝の六章に Which of you by taking thought can add one cubit unto his stature? の語を深く感じ候」と伝える。同じく山本あての一八九九年九月一五日の手紙で、求道と家族との関係につき、「キリストも余は平和の為に来らす　親と子を戦はせ云々」と、マタイ伝一〇章三四節の話を記している。再び金沢の四高に戻っていたが、やはり聖書は心の糧になっている。心の糧にしても、簡単に聖書から適切な教えが引き出せることは、それだけ西田が聖書を愛読していたことを物語る。

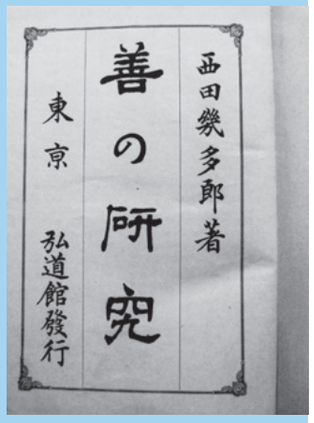
西田幾多郎

思想としての聖書

しかし聖書は、ただ西田にとり心の修養書だけにとどまらなかった。

西田は一九一一（明治四四）年、長年の考えをまとめて『善の研究』を公刊した。その後、思想の展開の成果は次々に書物となって世に出るが、それらを合わせた西田の著書のなかで、もっとも聖書の引用が多いものは、おそらく『善の研究』であろう。本書では随所に聖書の言葉に出会うが、もっとも強い印象を与えるのは、次のパウロの言葉である。

もはや余生けるにあらず
基督余に在りて生けるなり



『善の研究』

ガラテヤ書二章二〇節の名高い言葉である。これは、『善の研究』のなかでも度々使われている。それどころか、西田の全著作を通じて、もっとも頻繁に登場する聖句といってよい。右の部分は明治訳では「既（もはや）われ生るに非ずキリスト我に在て生るなり」となっている。一見両者は異なっているようだが、両者をかな書きにして読むと、まったく同文になる。すなわち、このころ西田は明治訳の聖書も愛読していたと思われる。あてられた漢字の相違は、聖書の本文をいちいち参照する必要のないほど身につけていたことを意味する。それだけ自己の思想にしてしまっていた言葉だったのである。西田は、パウロのこの実感の表白に、まさに「主客未分」をあらわす最適の経験を見たのである。

エッセー ㉙

聖書には「ちゃんと書いてある」

木崎さと子

先生は背にクッションをあてて、ベッドに半身を起してらした。数年前のことである。

私を思い出してくださるかどうか、心もとない、というよりも、そんな期待をするほうが、たとえ先生のご高齢を考えなくても、間違っている。四十年以上も前に、キリスト教系の学生寮で二年間お世話になった顔と、当時の寮長先生と同じ年齢になった顔が一致しないぐらい、当然のことである。何百人もの女子学生を預かり、送り出してこられたのだ。私など、当時の同級生に会ったって、なかなか思い出せないことが多いのだから。

先生は九十歳を超えても、かつての寮生の名と顔と結びつけ、家族関係まで思い出される記憶のいい方だったが、いまや百歳を六年も超えて、地域を限れば最高齢者であろう。正直いって私は、お話をまともに交わすこともできないかもしれない、という覚悟で、お見舞に伺ったのだった。

先生は昔と変わらぬ暖かい微笑で、迎えてくださった。私は旧姓を名乗り、ご挨拶してから、「こんな本を出しましたので……」と拙著を、ベッドに取り付けられた小さなテーブルの上にそっと置いた。分厚い本で、先生のお手に渡すには重すぎると思ったからだ。

私の名乗りやご挨拶に、先生は、ふん、ふん、と軽くうなずいて、思い出して頂いているのかどうか、判然としなかったが、本の表紙に目をあてられると、とたんに表情がぱっと変わった。『聖書物語』というタイトルが、先生の注意を惹きつけたのだ。

先生はやおら手を伸ばすと、表紙をめくり、巻頭の数ページを占める写真をしっかりと見つめられた。そして岩のドームが金色に輝くエルサレムの街の写真をごらんになると、「あなた、聖地に行ったの?」とお聞きになった。その声は、若々しく、女子学生だった私が朝晩に親しんだお声そのものだ。当時、先生は六十歳を超えてらしたが、お声に張りがあり、讃美歌を歌うときには、どの学生よりも大きな声で高い音程までカヴァーされた。

「二度参りました」と応えると、「私も行ったのよ」と、それはもう女学生のような活き活きした表情になられた。

私たちが寮生活を送っていたころ、テレビが食堂に入り、小さなモノクロの画面で、折から来日したマリオ・デル・モナコの『オテロ』に恍惚となったりした。ある午後、食堂に入っていくと、珍しくテレビに見入ってらした先生が、本当に満足げなお顔で、「これは聖書に書いてある通りよ。聖書にはちゃんと、こう書いてあるのよ」と独り言のように大きな声で宣言された。テレビの画面をみると、とっさのことでよくは分からないが、地球の生成を推理した番組のようだ。科学者たちが主張する仮説が、映像化されているらしい。

創世記の描写を、神話のパターンのように受けとめていた当時の私には、そんなに喜ばれる先生がいささか意外で、曖昧な相槌を打って、その場を逃げ出したものだ。

しかし、それからの何十年、折にふれて聖書の〝リアリズム〟を感じてきた結果、アダムとエバの失楽園ですら、ありありと感じるほどだから、エルサレムは現実の歴史を湛えた土地として、その聖性が迫ってくる。

聖書には「ちゃんと書いてある」という先生の満足感は、御自身が真実なものに従っている、と繰り返し確認する喜びだったろう。

先生のお疲れを恐れて、私はまもなくお暇したが、施設の玄関を出てから、先生のお部屋に傘を置き忘れてきたことに気づいた。廊下を伝って戻り、そっと扉を開いた。先生はもう寝台に横たわっていらっしゃるだろう、と足音をころした私の目に映ったのは、さっきよりさらに身を起して、『聖書物語』を両手で抱え、読みふけっているお姿だった。

お別れする前に先生が、私にむかって、というより独り言のように「ああ、嬉しい。これでまた勉強ができる」とおっしゃったので、これが百六歳の方の言葉か、と私は驚いたが、それは言葉だけのことではなかったのだ。

この本は、旧約から新約まで聖書全体を百の物語にわけて、解説したり文学的に解釈したり感想を述べたり……したものだが、そのために内外の夥しい数の本を参考にし、怠け者の私としては例外的に勉強した。大変ではあったけれど、その間の充実感は忘れがたい。この仕事を通して私は、旧約のかぎりない面白さ、新約の、目の覚めるようなかぎりない新しさ、にあらためて目をみはった。生涯、聖書を読み続ける……当然ながら。

人生は歴史と永遠の接点として与えられたものだ、と聖書を読めば実感できるから。

寮では、朝は一同揃って讃美歌とお祈り、晩の礼拝には、当番制で学生が聖書の数節を選び、朗読する。金曜の夜と日曜の朝には、長い本格的な礼拝があった。人生を知らず生意気な女子大生は、不当な義務を課せられたと感じるときもあったが、いま深く思う。聖書に親しむ機会を若い日に与えられた幸せを。

木崎さと子（きざき　さとこ）
作家

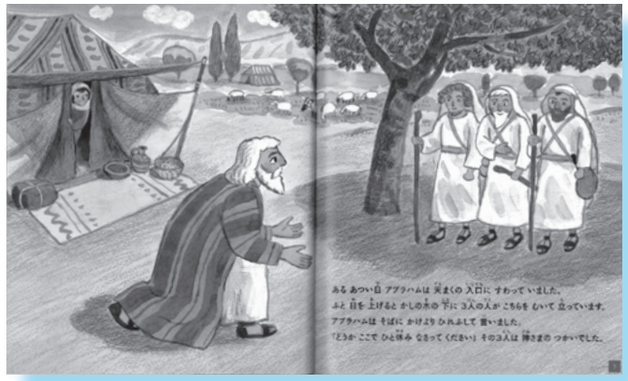
みんなの聖書 **絵本シリーズ**

『聖書　新共同訳』準拠

2008年4月に発売が開始された絵本シリーズ。今回は第3巻と第4巻を描き終えての思いを画家のお二人に語っていただきました。

アブラハムの心を思って――藤本四郎

「アブラハムものがたり」では、一つ一つの場面がアブラハムの心境を表すものとなるように……と努めました。神の約束の場面では、満天の星の下で神の言葉を聞きつつ天を仰ぐアブラハムの姿を、またイサクを献げるようにと言われてモリヤの山を登ってゆく場面では、山全体が悲しみに包まれているような色彩にして描きました。絵本を見る子どもや大人が、その時のアブラハムの心境を感じつつ読んでくれれば……と願っています。



「アブラハムのものがたり～やくそくをしんじて～」より © 絵・藤本四郎

旧約聖書・絵本シリーズを描く

藤本四郎　日本児童出版美術家連盟会員。アニメーションの美術・演出にたずさわった後、フリーのイラストレーターに。絵本画家、風景画家として活躍。ＮＨＫ文化センター水彩画講師。絵本・さし絵作品、小学校教科書のさし絵など作品多数。

六つの水がめと最初のしるし――杉田幸子

当時の結婚式は一週間も続くのだそうです。たくさんの人々がお祝いに来てくれます。そんな時、ぶどう酒が足りなくなったら困りますね。

イエス様のお母さんは、親戚の家なので、特にご心配なさったことでしょう。お母さんに相談されたイエス様は、水をぶどう酒に変えるという最初の奇跡をこの町でなさいました。

結婚式でお祝いしている人々の様子、音楽を奏でたり踊ったりしている様子、その楽しさが読む人に伝わればいいな……と思っています。

「カナのけっこんしき～お母さんのしんぱい～」より © 絵・杉田幸子

新約聖書・絵本シリーズを描く

杉田幸子　日本児童出版美術家連盟会員、童画芸術協会委員、子どもと大人のための絵画教室『アトリエ銀穂』主宰。子どもや自然をテーマに描き、各地で個展を開催。絵本、小中学校教科書の表紙・さし絵など作品多数。

気軽に手に取る《聖書の世界》

みんなの聖書マンガシリーズ

『聖書 新共同訳』準拠

新約聖書Ⅱ（第２巻）

使徒（アポストロス）

～遣わされし者たち～

第1巻、第2巻／ 288ページ
オールカラー／ A5判／定価（各巻）1,050円(税込)

旧約聖書Ⅰ（第3巻）
「創世（ジェネシス）～光を受けし者たち～」
9月発売予定

第1巻「救世主（メシア）～人類を救いし者～」に引き続き、第2巻「使徒（アポストロス）～遣わされし者たち～」が発売されました。第2巻では、ペトロやステファノたちのエルサレムでの出来事から、パウロの宣教旅行に続く使徒の働きが活き活きと描かれています。

〈絵本シリーズ刊行予定〉

●１年目配本予定（2008 年 4 月～ 2009 年 3 月）

太字は旧約、細字は新約です。

４月　せかいのはじまり
５月　少年イエスと洗礼者ヨハネ
６月　アブラハムものがたり～やくそくをしんじて～
７月　カナのけっこんしき～お母さんのしんぱい～
８月　サムソンのひみつ～力もちなのはなぜ～
９月　よきサマリア人～しんせつなきらわれもの～
10月　ギデオンのつのぶえ
11月　マルタとマリア
12月　星にみちびかれて～クリスマス（1）～
１月　ダビデとゴリアト
２月　ダニエルのなぞとき
３月　十字架の道

定価（各巻）：1,000 円（税込）
天地 250mm ×左右 210mm、上製本
オールカラー 30 ページ（解説 4 ページ含む）

音筆対応

「音筆（おんぴつ）」にも対応

絵本シリーズ発売開始と同時に、初年度 12 巻分の音声データを内蔵した音筆も発売いたしました。「音筆」で絵本の見開き番号にタッチするだけで、そのページの朗読をクリアな音声で聴くことができます。まだ文字を読むことのできないお子さまが、ひとりでも絵本聖書を楽しめます。２年目以降はデータを差し替えることでご利用いただけます。

朗読：久米小百合さん
（教会音楽家・日本聖書協会親善大使）

定価：15,750 円（税込）

音筆についての情報は日本聖書協会のホームページをご覧ください。

日本聖書協会　http://www.bible.or.jp

日本聖書協会ウェブサイトをご活用ください

トップページ

「アブラハムものがたり」の立ち読み画面

「カナのけっこんしき」の立ち読み画面

日本聖書協会ウェブサイトのトップページ http://www.bible.or.jp には、月替わりで横山匡さんの「聖書の世界」の写真、聖書愛読こよみの日課の聖句が表示されます。また、新刊から外国語聖書まで、さまざまな聖書をインターネットにてお買い求めいただけます。その他、聖書普及の活動紹介や海外ホットニュース、インターネット募金や後援会入会などにも対応しており、ウェブサイトは日々新しくなっています。4月から刊行している「みんなの聖書 絵本シリーズ」の立ち読みもできます。ぜひのぞいてみてください。

久米小百合さんが 親善大使2年目を迎えました

～メールマガジンにてエッセイを連載中です～

2008年6月、久米小百合さんが親善大使に就任して1周年となりました。2年目を迎えて、5月発行の聖書協会メールマガジンから、久米さんのエッセイの連載が始まりました。文具やスイーツなど毎回肩のこらない話題が取り上げられていて、気取らない人となりが感じられます。お読みになりたい方は、ぜひメールマガジン（携帯アドレスは不可）をご購読ください。通信費のみで、無料でお読みいただけます。ウェブサイト http://www.bible.or.jp/mailmag/ からメールアドレスを入力するだけでご登録いただけます。毎月20日以降1回配信されます。

久米小百合さんのページ
http://www.bible.or.jp/soc/kume.html

聖書リレー通読報告

以下の教会が新たに聖書リレー通読を完了いたしました！

1. 日本キリスト教団 沼津教会

2007年9月23日(日)～30日(日)
「ステンドグラス完成記念」聖書リレー通読
●所要時間：91時間
●参加人数：約100名
●参加者層：教会員65名
　　教会員以外35名

3. 日本イエス・キリスト教団 荻窪栄光教会

2008年6月25日(水)～29日(日)
●所要時間：91時間
●参加人数：164名

2. 日本キリスト教会 札幌白石教会

2008年5月11日(日)～5月25日(日)
●所要時間：約100時間
●参加人数：60名
●札幌東部4教会からの応援（21名）以外にも他教会からの応援がありました。

詳細は日本聖書協会ホームページにて随時更新しています。
→http://www.bible.or.jp/read/read14.html

日本プロテスタント宣教150周年記念 準備報告

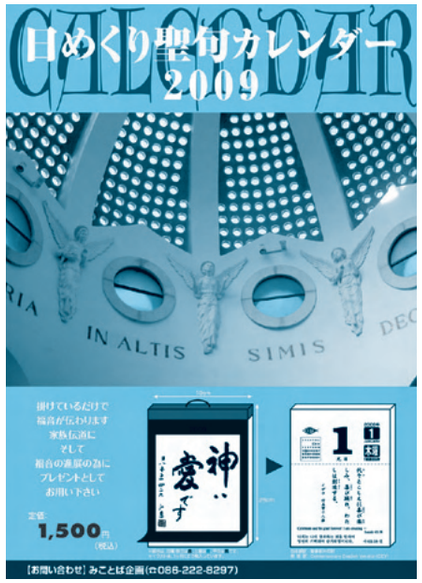
1859年の日米修好通商条約締結によりプロテスタントの宣教師が来日してから、2009年に150年を迎える。これを機にプロテスタント諸教会・団体の教派を超えた集まりが予定されている。今年4月に1年の準備期間を経て、「日本プロテスタント宣教150周年記念実行委員会」が発足した。実行委員長は、大川従道（大和カルバリーチャペル主任牧師）、峯野龍弘（ウェスレアン・ホーリネス教団 淀橋教会主管牧師）、山北宣久（日本基督教団 総会議長）の三氏、事務局長には日本聖書協会総主事の渡部信が選ばれた。2009年7月8、9日には、横浜市のパシフィコ横浜で記念大会を開催予定。実行委員会では、「キリストにあってひとつ～主イエスの証し人として～」の統一スローガンとロゴを用いること、一人のリーダーや特定の団体が引っ張るのではなく、「手と手をつなぎ」各派対等に準備を進めていくことが確認された。この活動に賛同していただける教会・団体も募集している。お問い合せは、

「日本プロテスタント宣教150周年記念事務局」
事務局長　渡部 信
住所　〒104-0061　東京都中央区銀 4-5-1
　　（財）日本聖書協会内
電話　03-3562-8725
FAX　03-3567-4435
Eメール　protestant150thanniv@bible.or.jp
URL　http://www.protestant150.org
日本聖書協会のベランドまで。

実行委員会発足式（淀橋教会にて） ©リバイバル新聞

2009年『日めくり聖句カレンダー』販売のご案内

ろう者の方が待ち望む、『手話訳聖書』の全巻完成をめざして



生まれつき耳の聞こえない方々にとって、文字で書かれた聖書を読むことはたいへん困難です。そんな方々が日常慣れ親しんでいる「手話」で聖書を読むことができるように、『手話訳聖書』の製作を「日本ろう福音協会」と協力して進めています。DVD1枚分（約120分）の翻訳・製作のためには、約200万円の資金を必要としますが、ほとんどの製作費が皆様のご献金により支えられており、発行されたDVDは1枚100円で頒布されています。

「みことば企画」様のご協力により、2009年『日めくり聖句カレンダー』を1冊ご注文いただくことで、定価1,500円の中から300円が『手話訳聖書』の製作費として用いられます。

＊「手話訳聖書」に用いられるのは、この申込用紙にてご注文いただいた場合に限ります。

昨年は皆様から467冊のご注文をいただき140,100円を「手話訳聖書製作」のためにお捧げいただきました。今年も昨年同様、ご注文くださいますようお願いいたします。

2009年『日めくり聖句カレンダー』1冊につき300円は、日本聖書協会と日本ろう福音協会が協力して進める「手話訳聖書製作」のために用いられます。

財団法人 日本聖書協会 募金部（TEL. 03-3567-1980）

FAX. 03-3567-4436 財団法人 日本聖書協会 募金部 行

FAX注文書

※ご注文はFAXをご利用ください。

ご 芳 名

ご 住 所　〒　ー

TEL.　ー　ー

FAX.　ー　ー

ご 注 文　『日めくり聖句カレンダー』　冊を注文いたします。

※送料は1冊から10冊まで500円（一律）、10冊以上は無料です。恐縮ですが、お申し込みは10月末日までにお願いします。
先着順で発送いたします。発行数が限られておりますのでお早めにお申し込みください。売り切れの場合はご容赦願います。
発送、請求は「みことば企画」（TEL.086-222-8297担当/嘉崎）から直接いたします。

2008年度「海外聖書製作支援」計画について

皆さまのご献金に支えられて、今年度は以下のとおりの支援を行う予定です。

海外への聖書送品計画

エジプトへ	アラビア語聖書	92,000冊
フィリピンへ	タガログ語バイブルトーク	250個
チェコへ	チェコ語聖書	20,000冊
タイへ	アカ語聖書	3,000冊

UBS(聖書協会世界連盟)を通じて資金援助するプログラム

国／地域	内容	金額（US $）
コンゴ	ラリ語新約聖書翻訳	$11,151
シエラレオネ	クリオ語聖書翻訳	$15,796
チェコ	聖書協会の運営支援	$9,294
チャド	学校への聖書頒布	$3,339
中国	若者と子供への聖書頒布	$4,500
トーゴ	ミナ語旧約聖書翻訳	$18,998
	モバロク語新約聖書翻訳	$4,244
バングラディシュ	識字プログラム	$12,008
東ティモール	ファタルク語「ルカによる福音書」翻訳支援	$3,750
	テトゥン語聖書翻訳支援	$1,875
ブルガリア	インターネットでの聖書頒布	$2,870
	ノンクリスチャンへの聖書頒布	$2,520
ベラルーシ	学校教育のための聖書頒布	$5,229
	4カ国語正教会訳新約聖書の頒布	$3,602
	一般頒布	$1,169
ポーランド	共同訳聖書プロジェクト	$11,803
マレーシア	マレー語スタディバイブル製作	$4,332
ミャンマー	カチン語−英語対照聖書製作	$7,000
モザンビーク	ツィトコピ語聖書翻訳	$12,941
ルーマニア	視覚障害者のための聖書頒布	$22,882
ロシア	ブリヤート語旧約聖書翻訳	$23,000
UBS	聖書協会世界連盟事務局へ	$67,697
		合計 $250,000

※ 支援先国名五十音順

21世紀の今日も、いまだ世界の約半数（28億人）もの人々がみことばに触れることなくその一生を終えていきます。
すべての人に福音が宣べ伝えられる日の実現のため、日本聖書協会はこれからも海外の聖書頒布支援を進めてまいります。
皆さまのご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

世界中のすべての人がみことばに触れることができますように！

日本聖書協会 後援会にご入会ください！

すでに会員の方は、お友達にお勧めください。

聖書は、キリストを信じる者に永遠の命を約束する「命の糧」です。この「命の糧」である聖書を届ける活動は、教会にとって欠くことができない働きであり、「すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ16：15）というみ教えによって、すべてのクリスチャンが主イエス・キリストから期待されている使命です。日本聖書協会の133年にわたる聖書頒布の働きも、多くの方々のお祈りとご献金によって支えられてまいりました。日本にも、世界にも、いまだ聖書から遠ざけられている多くの人々がいることをぜひ覚えて、お祈りください。そして、これからも聖書を届ける働きを継続していくため、後援会員としてご支援くださいますようお願い申し上げます。

お献げいただく年会費によって、以下のプログラムが支えられています。

●海外聖書製作

貧困や災害、政情不安によって聖書を製作することが難しい国々の聖書協会に対して、聖書贈呈や資金援助を行っています。

●手話訳聖書製作支援

生まれつき耳の不自由な方々に、日常慣れ親しんでいる言葉である「手話」で聖書を読んでいただけるよう、「手話訳聖書」ビデオ・DVDの製作を資金面で支えています。

●点字聖書製作

点字聖書1冊（旧・新約聖書34冊、続編6冊が必要）の製作費は1,600円ほどですが、製作費をご献金でまかなうことにより、1冊100円、全巻でも4,000円での頒布を実現しています。

ご入会いただいた方には、会員証と会員バッジを進呈し、年４回発行のニュースレター「からし種」をお届けして、日本聖書協会の働きを詳しくご報告いたします。聖書普及の働きがいつまでも続けられるよう、継続的なご協力をぜひお願いいたします。

女性用　男性用

★年会費は下記の5種類からお選びいただけます。

A：1,000円　B：3,000円　C：5,000円　D：10,000円　E：50,000円

後援会入会申し込みは、綴じ込みハガキをご利用ください。

ホームページでも「入会申し込み」をお受けしています。　http://www.bible.or.jp/collection/col07.html

Become a member and support the Bible Work

編集後記

今回は、聖書の翻訳に焦点を当てた「聖書翻訳ワークショップ」を特集として取り上げました。読者の皆様にも、ご自分がよくお読みになる訳があると思います。それぞれの訳には個性があり、逐語訳もあれば意訳もあります。どのような訳になるかは、その時に設置された翻訳委員会の方針、スコポス（目的）により変化します。聖書の翻訳は、一〇年以上もかけて行われる大きな仕事です。聖書が神のみ言葉だからという理由のみならず、時代に即した読み継がれる翻訳を目指していく上でワークショップが用いられたのであれば幸いです。

今号の表紙の絵は沖縄です。沖縄には、一八四六年から八年間、ベッテルハイムが滞在し、迫害を受けるなど、困難な状況下で琉球語訳聖書を翻訳した背景があります。それから三世紀ほど遡った一五四三年に渡来したザビエルや、ベッテルハイムよりやや遅れて来日したゴーブルにヘボン……。日本では、多くの宣教師が訪れて現在の教会が成り立ってきました。多くの宣教師や翻訳者たちの恩恵により、聖書も存在しています。日本聖書協会も超教派の団体として、皆様のご支援により一三三年の歴史を刻んでまいりました。本誌『ソア』にも、教派を問わず多くの方々にご執筆いただいております。奇しくも来年はプロテスタント宣教一五〇周年です。日本におけるクリスチャンの一致がますます深まることを願いつつ。

ぜひお読みになったご感想やご意見、ご要望などをお寄せください。